令和七年度

龍谷大学付属

平安中学校入学試験問題

受験番号

国語

解答上の注意

- 一. この問題用紙は「はじめ」の合図があるまで開いてはいけません。
- 二. 答えはすべて解答用紙の決められたところに書きなさい。
- 三. 解答用紙の決められたところに受験番号を書きなさい。氏名を書いてはいけません。
- 四. 問題を読むときに、声を出してはいけません。
- 五. 問題内容についての質問は受けません。
- 六. 印刷が読みにくいときは手をあげて監督者を呼びなさい。
- 七. 「やめ」の合図があつたら、解答用紙をおもてに向け、問題用紙を解答用紙の上に置いて、回収が終わるまで席を離れてはいけません。(問題を持ち帰ることができません)

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

京都に住むようになって一年になる。世界遺産や文化財、観光全般に関心のある私にとって、わが国有数の歴史観光都市京都で暮らす一瞬一瞬は、一言では言い表わせないほど豊かな至福の時間の連続だ。実際、京都に居を構えてみると、時折旅人として京都に降り立っていたときは①違ったものが見えてくる。

季節の移り変わりを告げる行事や風情が色濃く残るのも、市民として暮らして初めて体感できる京都の良さだ。②節分といえば、都市に住む多くの人にとっては、スーパーマーケットやコンビニの戦略に乗せられたように、恵方巻を買ってまるで修行の一環のように黙々と食べる日になってしまったが、京都の寺社では至る所で鬼を追い払う本来の「節分会」が行なわれ、※洛中をちよつと歩けば、「本物」の鬼に幾度となく出会う。寺社の境内や老舗の店頭では、節分の日にしか販売されない様々なお菓子が春の訪れを告げていて、つい財布のAが緩んでしまう。

そんな市民の一人として※京洛のあちこちを駆けまわる日々で感じるものの一つに、圧倒的な観光客、とりわけ外国人観光客を見かける頻度の高さがある。京都駅や有名寺社で遭遇するのはもちろんのこと、地元民でも知らないようなマイナーな寺社や観光地から離れた飲食店でも、観光客と思しき外国人に出会う機会は数知れない。

③町家が並ぶ中心街の狭い通りにいつのまにかプチホテルや民泊の施設を発見するのは日常茶飯事だし、ホテルといえ、JR京都駅の南側に当たる八条口に降り立つと、建設中のホテルから伸びるクレーンが林立するのが見える。二〇一九年だけでも、このエリアに④八棟ものホテルが開業すると言われている。

る。

地下鉄や私鉄、JRの路線が東京や大阪ほど発達していない京都では、市バスが市民の主要な足となっていて、私もよく利用する。私が勤める大学でも市バスで通学する学生は少ないが、溢れる観光客の影響で、バスの遅延やバス停の通過も観光シーズンにはごくありふれた光景になった。学生から「バスが二台続けて満員で、バス停を通過してしまつて遅刻しました！」と言われれば、教員としても怒りづらい。市民の足であるはずの市営バスは、地元の買い物客や通勤・通学者といった生活者を目的地に運ぶという本来の役割を果たせなくなりつつあるのだ。

こうした状況は、観光学の世界では「オーバートーリズム」と呼ばれ、持続可能な観光に大きなマイナスとなっている。また、もう少しインパクトのある言葉で、観光客の急増により市民生活に悪影響を及ぼすことをメディアなどで「観光公害」と呼ぶことがある。こうした事象に「公害」という言葉を安易に使うのは、本来の公害の被害に遭われた方々のことを考えると個人的にはあまり好きではないが、⑤その問題のインパクトの強さを示すのに一定の役割を果たしている、本書のタイトルにこの言葉を使うことにした。I、この「観光公害」は、京都のみならず日本の観光地の多くに見られる現象であるばかりでなく、海外でも大きな問題となっている。

後ほど詳しく触れるが、世界は今や「大観光時代」の到来を迎えている。発展途上国の経済成長により、これまで旅行できなかった人が飛行機や長距離列車にたやすく乗れるようになったこと、格安航空会社(LCC)の伸長や安価なクルーズ船の増加など移動に関する費用が※相対的に下がっていること、各国が観光に力を入れるため※入国ビザの要件を※緩和しつつある

ことなどが相まって、世界的に観光客数は大きく増加している。予想以上に観光客が増えたり、受け入れ態勢が不十分だったり、**B**の違いなどによる観光客と市民の※軋轢が生じたりして、観光客の増加が市民生活を脅かす状況は、いまや世界中で起きていると言ってもよい。

二〇一八年九月、私はオーバートーリズムの実態を調査するため、スペイン東部のカタルーニャ地方とバレアレス諸島を訪れた。スペインは今や国際観光客数がフランスに次いで世界第二位の観光大国で、急激な観光客の増加が多く歪みをもたらしている典型例と言われている。カタルーニャ地方の中心バルセロナや、地中海に浮かぶイビサ島、マヨルカ島では、京都同様、街の中心部の住宅が観光客用の民泊に転用され、それが家賃の高騰をもたらし、住民が街中に住めないという状況が出てきているのを目の当たりにした。

水の都ヴェネツィアや二〇一七年に世界遺産に登録された中国・福建省、厦門中心街の対岸に浮かぶコロンス島では、市民の足であり観光客の足でもある船の乗り方について、新たなルールを設けている。

「観光」は、本来、それを受け入れる地域にとっては、恩恵の多いアクティヴィティである。観光客が宿泊や体験、買い物で落とす経済的な効果は計り知れないし、その国や地域の理解につながり、国や地域のファンを増やす。ある国を訪れてそこを好きになってくれることは、抽象的な「友好」や「親善」という言葉を何十回唱えるよりも、はるかに相互理解や平和に資するだろう。観光をする個人にとっても、普段の生活を離れ、異なった文化に身を浸す非日常の旅は、心身をリフレッシュする大きな効果をもたらす。

Ⅱ、「観光客」は、受け入れ側にとっては「日常」を揺

るがす存在にもなる。平穏な日々を送りたい地元の人の生活空間に、羽目を外したい※異邦人が入り込めば、そこには悪感情や摩擦が生じる。その意味では、⑥「観光」という行為には、内在的に摩擦や軋轢を生み出す要素があるのが当然と見るべきかもしれない。

（佐滝剛弘

『観光公害 インバウンド4000万人時代の副作用』）

※（文中のことばの意味）

洛中 … みやこの中。ここでは、京都の市中をさす。

京洛 … みやこ。ここでは、京都のこと。

相対的 … 物事をほかのものと比べてとらえるようす。

入国ビザ … 外国から来る人に与える入国許可証。

緩和 … 厳しさや激しさの程度をゆるめること。

軋轢 … 対立し、調和しないこと。

資する … 実際に役立つ。

異邦人 … 外国の人。

問1 I・IIにあてはまることばとしてふさわしいものを、次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア そして
- イ しかしながら
- ウ あるいは
- エ したがって
- オ つまり

問2 線①「ちが違ったものが見えてくる」とありますが、「見えてくる」ものとして、**ふさわしくないもの**を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 移りゆく季節を感じさせる行事や風情
- イ 修行のように黙々と食べる恵方巻
- ウ 鬼を追い払う「節分会」の行事
- エ 老舗の店頭に並ぶ限定のお菓子

問3 線②「ぶ節分」に由来するといわれていることばを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア まな板の鯉こい
- イ 海老えびで鯛たいを釣る
- ウ 鰯いわしの頭も信心から
- エ 鯖さばを読む

問4 Aにあてはまることばを、ひらがなで答えなさい。

問5 線③「みんぱく民泊の施設」とありますが、「民泊の施設」が増えることにより、住民の住宅事情はどのような状況になりますか。文中から二十六字でぬき出し、はじめと終わりの四字を答えなさい。句読点なども字数に数えます。

問6 線④「とちう八棟ものホテルが開業する」とありますが、このことは何を表していますか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 京都にやってくる観光客を一ヶ所に集める対応策がとられていることを表している。
- イ プチホテルや民泊施設よりも大きなホテルの方が増えつつあることを表している。
- ウ 京都にますます多くの観光客が押しかけて来るであろうことを表している。
- エ JR京都駅の八条口が京都で最も多くの観光客をかかえていることを表している。

問7 線⑤「その問題」とありますが、どのようなことですか。文中から二十三字でぬき出し、はじめと終わりの四字を答えなさい。

問 8

問 8 B にあてはまることばとして、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 政治や経済
- イ 気候や風土
- ウ 文化や習慣
- エ 人種や体格

問 9

問 9 線⑥「『観光』という行為には、内在的に摩擦や軋轢を生みだす要素があるのが当然」とありますが、なぜですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 買い物による経済的な効果の影響で、羽目を外した観光客が日常的に増えているから。
- イ 観光客による市民生活への妨害行為が、地元住民にとって日常のものになると困るから。
- ウ 観光客をもてなす市民としては、日常の生活から離れることはできないから。
- エ 受け入れる住民側にとってみると、観光客は平穏な日常をおびやかす存在でもあるから。

問 10

問 10 次は本文を読んだ花子さんと太郎さんの会話です。x y z にあてはまることばを、それぞれ文中からぬき出しなさい。ただし、x・y は三字、z は四字で答えなさい。

花子 「私も市バスで通学しているけれど、外国からの観光客が多いと感じているわ。平安中学校の近くには京都水族館もあるので、家族連れの人も多いわね。大型の手荷物を持ち込む人が多くて、バスがよく混雑しているの。」

太郎 「だから市バスでは、大きな手荷物を車内に持ち込まないように新たな x を作って呼びかけているよ。」

花子 「あと、京都市では市バスの一曰乗車券を廃止して、y の利用を呼びかけているようね。」

太郎 「でも、y は営業範囲がせまいから、あまり効果がなさそう。そこで、大型手荷物をトランクで預かってくれる新たな有料バスのサービスが始まったらしいよ。」

花子 「住民が観光客を歓迎でき、観光客も満足することで、z な観光が実現するのだと思う。そのためには、新たな x を作って対策しないと、観光客も住民も安心はできないわね。」

太郎 「京都市民のひとりとして、どうせなら、京都に来て良かったと多くの人たちに思ってもらいたいな。」

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

二十四歳の麻生人生は東京で引きこもり生活を送っていた。ある日、母親が数枚の年賀状を残し姿を消してしまったため、その中の一枚を頼りに、長野県にいる祖母（マーサばあちゃん）を訪ねたが、祖母は認知症を患っていて人生のことがわからなくなっていた。また、そこには父の再婚相手の娘だという、対人恐怖症のつぼみがいた。本文は、人生が大切にしていた携帯電話を祖母が誤って池に落としてしまい、人生が東京に帰ることを決意したところからである。

ポストンバッグを提げると、人生は、囲炉裏端で 所在 なさ そうに突っ立っている ばあちゃんに向かって、無理矢理笑顔を作って見せた。

「じゃあ、おれ……行くよ」

ばあちゃんは、やはり何も言わずに、じっとこちらをみつめている。さびしげな目を見まいと、人生は顔を逸らした。

「……行っちゃうのね」

耳もとを通り過ぎる風のような、ささやかな声があった。人生は、もう一度、ばあちゃんを見た。ばあちゃんの目には、いっばいに涙が浮かんでいた。それを振り切るようにして、人生は玄関へと急いだ。

湿ったスニーカーに足を突っこむ。ばあちゃんが追いかけてくる気配があった。人生は、下を向いたまま、いまはもう冷たい夕暮れが広がり始めた庭へと出ていった。

「ほんとに行くの？」

ジャケットのポケットに手を突っこんで、玄関先に突っ立っていたつぼみが 念を押した。人生は、うなずいた。

「頼むよ」

切実な声に、つぼみはもう何も言わなかった。

A 雪を踏みしめて、※ 畦道を下っていく。振り向くな、絶対に振り向くな。① 呪文のように、人生は自分に言い聞かせていた。

振り返って、もしもそこにはあちゃんがいたら。

弱い心は、たちまち引き戻されてしまうだろう。

父と、母と、子供の自分と。思い出のいっぱい詰まった、※ 蓼科の家。

父が逝き、母が消えてしまっても。子供の頃の純粋な気持ちをなくしてしまいたいまま。どんなに時が流れても、決して変わらない場所。

何もかも失って、ここへ帰ってきた。そして、ばあちゃんさえも失おうとしているいま、人生はようやく気がついた。

X

その瞬間、ふいに涙がこみ上げた。

ぐっと唇を噛んで、人生は助手席に乗りこんだ。つぼみが、小さくため息をついて、エンジンをかけた。

「じゃあ、行くよ」

つぼみの言葉に、うなずいたそのとき。

——人生！

ずっと遠くでこだまが響くように、名前を呼ばれた気がした。はっとして、人生は顔を上げた。

畦道の彼方に、B 小さな人影が見えた。ばあちゃんだ。転がるように、畦道を走ってくる。

——ばあちゃん！

つぼみがゆっくりとアクセルを踏んで、車は走り出した。人生は、車窓に張りつくようにして、ばあちゃんの姿を追いかけた。

顔もはつきり見えないくらい遠くにいるのに、人生にはわかった。ばあちゃんが涙を流しているのが。

ばあちゃん……どうして。

どうして、別れる間際まぎわになって、急におれの名前を思い出したりするんだよ。

涙が溢あふれて、こぼれ落ちそうになる。泣き顔をつぼみに見られるのだけは、どうしても避けさけなかった。

なんて弱い人間なんだ、おれは。

人生は、思い切り上を向いた。そして、目を閉じた。せめて、こぼれそうになる涙をこらえるくらいの強さが欲しかった。

泣いてる場合じゃないだろ。これから、ひとりで生きていくんだから。

思わず、ぐすつとはなをすすった。泣いてんの？ ぼっかみたい、とつぼみに茶々を入れられるかと思っただが、色白の横顔はまっすぐ前を向いて無言のままだ。

車は駅に向かって、一直線の道に差しかった。

真っ白い雪原の彼方に、悠々と横たわる八ヶ岳やつかたけの峰みね。その斜面しゃめんをオレンジ色に輝かがかせて、太陽がゆっくりと傾かたむいていく。昨日、「めし」屋の志乃しのさんに送おくってもらって駅から来たときは、真っ暗で何も見えなかった。けれどいま、こうして眺ながめてみると、それは幼い頃に胸に焼きつけられたなつかしい風景だった。

(中略)

人生とつぼみは、道中、^②とうとうひと言も口をきかずに、茅野駅ちののえきに到着した。

モダンな駅舎前のロータリーに車は停とまった。人生は、両手で **C** 顔をこすると、つぼみのほうを向いて「ありがとう」と言った。

「助かったよ。……運転、うまいんだな」
つぼみは、ふっと笑顔になった。

「まあね。車に乗るのも治療ちりょうになるからって、※新多あらたパパに免許めんきょ取りにかされたんだ。密室で教官とふたりつきりになるのが平気だったら、誰だれとでも渡り合わたえるようになるぞ！ って」

そう言いって、ぼん、と人差し指でハンドルを軽く叩たたいた。

「ほんと、パパの言う通りだったな。……実はね。教官以外の男の人とふたりつきりで車に乗ったの、これが初めてだったんだ」

少し照れくさそうな声で、へんなの、とつけ加えた。人生は、ようやくうつすらと笑顔になった。

「じゃあ、元気で……ばあちゃんのこと、よろしく頼たのむよ」

白い横顔が、こちらを向いた。さびしそうな色が目に浮かんでいる気がした。人生は、急いで顔を逸よらすと、ボストンバッグをつかんで外へ出た。ボタンと勢いきいよくドアを閉める。すぐさま助手席の窓が下がり、つぼみが運転席から身を乗り出して聞いた。

「いいの？ ほんとに」

「何が？」 人生はとぼけて訊きき返した。

「東京の家に帰っても、お母さん、いないんですよ。ケータイもお金も仕事もなくて、どうやってひとりで生きてくわけ？」

最後の最後に、ずばりと言いわれてしまった。人生は、わざとふくれっ面を作つくって、「そうだよ。何か問題あるのかよ」と答えた。

「強がっちゃって」つぼみがぐすつと笑った。「ぼっかみたい」「ほっとけ」人生は舌を出して見せた。

つぼみがいつまでも発車する気配がないので、人生は、「早く行いけよ」と言った。

「ばあちゃん、待まちってるから」

^③自分の言葉に、胸の奥がちくんと疼いたいた。
いつも、いつまでも、待まちってるから。

ずっと昔、別れ際にばあちゃんが言ってくれたひと言が、耳の中で響いている気がした。

「そっちこそ。早く行きなよ」

つぼみが言い返す。人生は、意地になってもう一度言った。

「いいから、行けって。そっちが行くまで、こっちも行かねえぞ」

Dをすくめて、つぼみは助手席の窓を下げた。そして、ちらりとこちらに目配せすると、アクセルを踏んで、瞬くまに去ってしまった。

※リアランプが遠ざかっていくのを眺めて、人生は④ため息をついた。

行っちゃまった。

③踵を返すと、駅構内へと続く階段を上っていく。行かないで、と最後に言ってくればすまいかと心のどこかで期待していた自分が恥ずかしかった。

改札へと続く通路上に「ようこそちのへ」の看板が見える。その下を通して、駅前のロータリーへ向かったのは昨日のことだ。それなのに、はるか昔のことに感じられる。

ばあちゃんちにたどり着けるかどうか不安だったけど、ケータイがあるからなんとかなるだろ、って思いながら、ここを通ったんだっけな。結局、ケータイはなんの役にも立たなかったけど。

その代わり、助け舟を出してくれたのは「めし」屋の志乃さん。うまいそばを食べさせてくれて、ばあちゃんの家まで送ってくれたんだ。

どうやって蓼科までたどり着いたらいいのか、よく考えたら、自分は一度も携帯の情報を見たりしなかった。

教えてくれたのは、駅員と、タクシートの運転手と……。それぞれの場所に働く人がいた。通りすがりの親切な人がいた。

おれは、ケータイなんかにも最初から頼ったりしなかったんだ。

(中略)

『まもなく3番線に、普通電車、※小淵沢行きが到着いたします……』

人生は、急いで階段を下りていった。人影もまばらなホームに出ると、冷たい北風が頬を撫でた。

振り返ると、駅前の町並みが見えた。あの家々の裏側に、志乃さんの店がある。そのずっと向こうの山並みを背景に、マサバあちゃんの家がある。

八ヶ岳の雄大な風景を仰ぎ見るかのように、人生は茜色の空を仰いだ。

ホームの先端まで、⑤とぼとぼと歩いていった。線路の彼方でヘッドライトがちかちかと光る。電車は、ゆっくりと減速しながら、⑥とぼとぼ近づいてくる。

電車の正面をみつめながら、人生は、ジャケットのポケットの中を無意識に探った。

カイロのように握りしめていたケータイは、もうない。その代わり、左側のポケットの中で指先が触れたのは、一枚の紙。

人生は、それを取り出した。ばあちゃんから母へ宛てた年賀状だった。

最近、どう？ がんばりすぎてない？

人生は、どうしてですか。彼らしい「人生」を送っているかしら。

私は余命数ヶ月、残された日々を生き生きと暮らしていこうと思っっています。

あなたと人生に、もう一度会えますように。私の命が、あるうちに。

流れるような文字、見覚えのあるなつかしい文字。穴が開くほど、人生はみつめた。

引きこもりだった自分を、外の世界へ引っぱり出してくれた一枚のハガキ。

蓼科まで導いてくれたばあちゃんの言葉。

目の前に、電車が停まった。プシューッと音を立ててドアが開く。ばらばらと数名の乗客が、コートのポケットに手を突っこんで、**E**をいからせ降りてくる。

『小淵沢行き、発車いたします』

ゴトン、と車体が動く。ゴトン、ゴトン、ゴトン。だんだん、加速する。ホームから遠ざかる電車は、やがて線路の彼方へ消えていった。

誰もいなくなったホームに、ぼつんとひとつだけ、人影が残された。

——人生だった。

年賀状をポケットに突っこんで、顔を上げた。踵を返して、駅の構内へと続く階段を駆け上がる。

改札口で、**⑦**乗るのやめました、と切符を払い戻した。

相当カッコ悪いぞおれ。だけど、これでいいんだ。

帰ろう。ばあちゃんのところへ。

駅前のロータリーへと続く階段を駆け下りる。ふと前を見ると、見覚えのある水色の軽自動車が停まっていた。軽くクラクションを鳴らして、運転席につぼみの顔が見えた。ばっかみたい、と微笑む顔が。

（原田マハ 『生きるぼくら』）

※（文中のことばの意味）

畦道　：　田と田の間の細い道。

蓼科　：　長野県茅野市の地名。

新多パパ　：　「人生」の父。

茅野　：　長野県の地名。

リアランプ　：　乗り物の後部あるいは後背面にあるランプ。

小淵沢　：　山梨県の地名。

問1 線①〜③のことはについて、文中における意味として最もふさわしいものを次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

① 所在なさそうに

- ア どうすることもできずに
- イ 反省するように
- ウ じやまにならないように
- エ わけもわからずに

② 念を押した

- ア 賛成した
- イ 急がせた
- ウ 確かめた
- エ 疑った

③ 踵きびすを返すと

- ア 表情を変えると
- イ 返事をする
- ウ 無視をすると
- エ 方向を変えると

問2 線①〜③にあてはまることばとして、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア A さくさくと B ぼつんと C ごしごと
- イ A さくさくと B ぼんやりと C ぼんぽんと
- ウ A しんしんと B ぼつんと C ごしごと
- エ A しんしんと B ぼんやりと C ぱんぱんと

問3 線①・②に共通して入ることばとして、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 腹 イ 頭 ウ 腕うで エ 足 オ 肩かた

問4 線①「呪文じゆもんのように、人生は自分に言い聞かせていた」とありますが、なぜですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 大切な物を落としてしまったことに腹が立っていて、「ばあちゃん」の顔を見る気にはなれなかったから。
- イ 東京に帰るという自分の決心がゆらいでしまわないためにも、「ばあちゃん」の顔を見たくなかったから。
- ウ 一度決めたことをくつがえすわけにはいかず、「ばあちゃん」とも「つぼみ」とも話す気になれなかったから。
- エ 「ばあちゃん」の説得に応じないためにも、同じことばをくり返すことで強い心を保つ必要があるから。

問5

X

にあてはまることばとして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア この場所に、いつかもどってきたいと思っていたんだ
- イ この場所こそが、おれのふるさとだったんだ
- ウ これからここで、新しい生活が始まるんだ
- エ もう少しの間、ここにいたかったんだ

問6

——線②「とうとうひと言も口をきかず」とありますが、なぜですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「人生」は、自分の弱さをばかにしようとするつぼみにいら立っていて、「つぼみ」は、「人生」が自分たちを残していくことに腹を立てているから。
- イ 「人生」は、「ばあちゃん」との思い出が詰まった家を離れるさびしさを感じていて、「つぼみ」は、「人生」が何を考えているのかが気になり表情をうかがっているから。
- ウ 「人生」は、今後の生活を一人で過ごすことへの不安を想像していて、「つぼみ」は、「人生」を無事に駅まで送り届けられるように運転に集中しているから。
- エ 「人生」は、泣きそうになっているのをこらえながらなつかしい風景を眺めていて、「つぼみ」は、「人生」と車の中で二人きりでいることに緊張きんちやうしているから。

問7

——線③「自分の言葉に、胸の奥おくがちくんと疼うずいた」とありますが、なぜですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「つぼみ」との会話は、「ばあちゃん」との今後の暮らしを心配させる内容だから。
- イ 「つぼみ」への返事へんじの言葉は、どれも自分の本心から出たものばかりだから。
- ウ 「つぼみ」に言い放った言葉は、記憶きおくの中にある「ばあちゃん」の言葉だったから。
- エ 「つぼみ」を帰宅させるための言葉は、「ばあちゃん」の口ぐせだったから。

問8

——線④「ため息をついた」とありますが、この時の人生の心情がわかる表現を文中より三十五字以内でぬき出し、はじめの五字を答えなさい。句読点なども字数に数えます。

問9

——線⑤「とぼとぼと歩いていった」、——線⑥「ど
んどん近づいてくる」とありますが、これらの表現は、「人
生」のどのような様子を表していると考えられますか。最
もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。
い。

ア ケータイなしでは生きられない自分の弱さに気づき、少
しでも早く自立した生き方ができるように、一刻も早く東
京に戻りたいと気持ちがあせっているという様子。

イ ケータイを失ったことで周りの人の優しさに気づき、親
切にしてくれた人とのやりとりを思い出していると、あつ
という間に時間が経過してしまったという様子。

ウ ケータイがなくても生活できる自分に気づき、故郷とも
言えるこの場所を離れるという決意に迷いが生じている中
で、決断までの時間の限界がせまっているという様子。

エ ケータイは自分と世界をつなぐための道具でしかなか
つたことに気づき、必要以上に大切にしていたことを恥ずか
しく思いながらも、自分の判断に迷いはないという様子。

問10

——線⑦「乗るのやめました」とありますが、なぜで
すか。それを説明した次の文のⅠにあてはまることば
を、文中から三十文字以内でぬき出しなさい。また、Ⅱ
には文中のことばを使って、十五文字以内で答えなさい。句
読点なども字数に数えます。

Ⅱ

Ⅰ

気持ちが固まったから。

年賀状を見て

問11

文章全体における表現の特徴を述べたものとして、最も
ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「太陽がゆっくりと傾いていく」や「茜色の空を仰いだ」
という表現で、太陽が沈む時間の経過と「人生」の気持ち
が沈む様子を描いていて、悠々とそびえる八ヶ岳の山々と
対比させている。

イ 「プッシュウツ」「ゴトン」といった電車の擬音語の表現
は、駅にいるような臨場感を描くとともに、「人生」が二
度と東京に戻れなくなるという緊張感を表している。

ウ 「とぼけて」「ふくれっ面」「舌を出して」という表現で、
「人生」の陽気な性格を描き、「つぼみ」との仲が改善し一緒
に帰るという良い結末を予想させている。

エ 「ぼっかみたい」という表現は、「つぼみ」の口癖であ
るように三度繰り返して描かれているが、それぞれの場面
での「人生」の内面を反映し言葉の印象に変化を持たせて
いる。

三 () にあてはまることばとして、最もふさわしいものをあとから一つずつ選びなさい。

- ① わたしは日曜日、父() 鉄道博物館に行った。
- ② だから、一時間早く起きろと言った() 。
- ③ この木に登るの() 君には難しいだろう。
- ④ ピアノの発表会()、あと二日しかない。
- ⑤ 遠くの方() 雷がゴロゴロと鳴っている。

で と のに は まで

四 次の――線のカタカナは漢字に直し、漢字は読みを答えなさい。

- ① ベテラン選手がジユクレンの技を見せつける。
- ② 母にあこがれてカンゴ師を目指す。
- ③ 一日警察署長にシュウニンする。
- ④ 費用は全員でフタンすることになった。
- ⑤ 友人とのカチ観のちがいになやむ。
- ⑥ 次に上演するのは喜劇の予定だ。
- ⑦ なかなか憲法改正の議論が進まない。
- ⑧ 絹のような肌ざわりで心地よい。
- ⑨ 環境保全についての討論会に参加する。
- ⑩ 志望校合格の朗報が届く。

これで問題は終わりです。